受難節第３主日礼拝説教「できないあなたを引き受ける」予稿
日本基督教団石神井教会　2024年３月３日

【旧約聖書日課】ヨシュア記　24章14～24節

14あなたたちはだから、主を畏れ、真心を込め真実をもって彼に仕え、あ
なたたちの先祖が川の向こう側やエジプトで仕えていた神々を除き去って、
主に仕えなさい。15もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にい
たあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住ん
でいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選
びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」

16民は答えた。

「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません。17
わたしたちの神、主は、わたしたちとわたしたちの先祖を、奴隷にされてい
たエジプトの国から導き上り、わたしたちの目の前で数々の大きな奇跡を行
い、わたしたちの行く先々で、またわたしたちが通って来たすべての民の中
で、わたしたちを守ってくださった方です。18主はまた、この土地に住んで
いたアモリ人をはじめ、すべての民をわたしたちのために追い払ってくださ
いました。わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。」

19ヨシュアはしかし、民に言った。

「あなたたちは主に仕えることができないであろう。この方は聖なる神で
あり、熱情の神であって、あなたたちの背きと罪をお赦しにならないからで
ある。20もし、あなたたちが主を捨てて外国の神々に仕えるなら、あなたた
ちを幸せにした後でも、一転して災いをくだし、あなたたちを滅ぼし尽くさ
れる。」

21民がヨシュアに、「いいえ、わたしたちは主を礼拝します」と言うと、22
ヨシュアは民に言った。

「あなたたちが主を選び、主に仕えるということの証人はあなたたち自身
である。」

彼らが、「そのとおり、わたしたちが証人です」と答えると、23「それで
はあなたたちのもとにある外国の神々を取り除き、イスラエルの神、主に心
を傾けなさい」と勧めた。

24民はヨシュアに答えた。

「わたしたちの神、主にわたしたちは仕え、その声に聞き従います。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書　6章60～71節

60ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。
だれが、こんな話を聞いていられようか。」61イエスは、弟子たちがこのことに
ついてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまず
くのか。62それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。63命を与
えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言
葉は霊であり、命である。64しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもい
る。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切
る者がだれであるかを知っておられたのである。65そして、言われた。「こうい
うわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしの
もとに来ることはできない』と言ったのだ。」

66このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなっ
た。67そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われ
た。68シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きまし
ょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。69あなたこそ神の聖者で
あると、わたしたちは信じ、また知っています。」70すると、イエスは言われた。
「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人
は悪魔だ。」71イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。この
ユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

「その中の一人は悪魔」【こども説教のために】

「受難節（レント）」の四十日を、わたしたちは、主イエスの「荒れ野の誘惑」を心に留めながら歩んでいます。

主イエスは、荒れ野で過ごされた四十日、断食をされて、悪魔からの誘惑をお受けになられました。そして、「退け、サタン」と告げて、悪魔を離れ去らせたといわれます。

わたしたちも、悪魔を離れ去らせたいと願うでしょう。「受難節」の教会で大切にされてきたのは、「悪霊退散の祈り」です。「主の祈り」でも、「*わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください*」と祈ります。けれども、わたしたちの中から悪魔は、簡単には離れ去らないようです。悪魔は、わたしたちの中にいるからです。

主イエスは、弟子たちに向かって、「**その中の一人は悪魔だ**」とさえ言われました。それでも、主イエスは弟子たちに「**あなたがた…は、わたしが選んだ**」と言われるのです。

安心しましょう。わたしたちは、主イエスに選ばれてここにいるのです。たとえわたしたちの中に悪魔がいるとしても、主イエスは、その一人をも愛してくださっているのです。

「離れて行きたいか」

わたしが 24 年前に初任地として赴任した大分の小さな教会は、二年間、専任牧師がいませんでした。前任牧師時代、地方の弱小教会としては異例の規模の会堂改修・牧師館改築の事業に取り組み、教会の中に深い亀裂が生じていたのです。赴任早々、わたしは、一人の信者に真顔でこう言われました、「この教会には、サタンがいるんです」と。神学校を卒業したばかりのわたしには、その方がどのようなつもりでそうおっしゃられたのか確かめる術もなく、黙ってうなずくばかりでした。幸いにも、わたしがその教会に在任中に、悪魔やサタンらしい存在に振り回されることはありませんでした。

その後転任した神奈川の大きな教会は、付属幼稚園もあり、常に人間関係のトラブルが起こっているような教会でしたが、わたし自身が育った教会も同様でしたから、「教会とは、そんなものだ」と思っていました。信者の皆さんも、トラブルは日常茶飯事と承知しているようで、周囲の小さな教会から事情があって移ってくる方はあっても、逆に教会内でトラブルに巻き込まれたからと言って離れていく方は滅多にありませんでした。ただ、そのような教会は、牧師にとっては誘惑の多いところなのかもしれません。わたしの前任者も、その前の牧師も、ご自分の発言や振る舞いを咎められたことがきっかけで辞任されていました。わたしが何とかそうならずに踏みとどまれたのは、最初から参加していた市内の超教派教職者の会で経験豊かな牧師や司祭から教訓や助言を聞く機会があったからかもしれません。「教会の会議でどんなに腹を立てても、信者に向かって『退け、サタン』などと口走ってはいけないよ」と、失敗した牧師の実例を挙げておっしゃられたのは、ルーテル教会の隠退間近の牧師でした。

四年前、今日と同じ聖書日課が読まれていた頃、教会から多くの人が離れようとしていました。いいえ、世界中の教会で、離れて集まらないようにとの通知がされ始めていたのです。教会の中でだれもそれを望んでいなかったでしょうが、そうせざるを得ない社会情勢が、教会の判断を求めていました。わたしたちの教会が公式に「集まらないように」と皆さんに要請したのは、その年の受難週、「イースター」を迎えようとしていたときです。奉仕者だけが礼拝堂に集まり、インターネットで皆さんのご自宅に中継するだけの礼拝が、三カ月近く続きました。集まりは再開され、制限は無くなりましたが、あのときに離れてしまい、四年経っても元のようには戻って来れずにいる方が、いまだにいらっしゃいます。

それでも、わたしたちには、新しい仲間も与えられ、今日も、ここに集う者とされています。「**あなたがた…は、わたしが選んだ**」と主に呼ばれたからです。今日、それに応えることができたことを感謝せずにはいられません。

「父からお許しがなければ」

イスラエルの民をエジプトから導き出したモーセの後を継いで指導者となったヨシュアは、約束の地への入植が完了すると、人々をシケムという地に集めて告げました、「**主に仕えなさい。もし主に仕えたくないというならば…仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい**」と。

わたしたちには、自分で選ぶことが許されているのです。何を信じるか。どの宗教の信者になるか。今日どこに行くのか。日曜日の礼拝に出席するのか、しないのか。そのようなことを、だれに強いられることもなく、選ぶことができるでしょう。たとえ行動の自由が許されない時代や社会になったとしても、わたしたちの内心までを強いることは、だれにもできません。

そうだとしても、わたしたちが自分で選び、願ったことを最後までやり遂げて、自分を誇り、他の者にも認めてもらうことが、いつもできるかと言われれば、そんなことはないでしょう。「できる」と自信をもって言うことができる方も世の中にはいるかもしれませんが、今までできていたからと言って、これからもできるという保証はありません。

16 年前に死んだわたしの父は、世間的に言えばエリートコースを歩んだ「できる」人でした。医師としてのライフワークを亡くなる一年半前まで続けていましたし、葬儀には実に多くの方が参列してくださいました。その父が亡くなる四週間前、わたしは一時退院中の父を訪ね、一人、しばらく父のベッド脇に座っていました。元来は話し好きな人でしたが、すでにその元気はありませんでした。ただ、ボソッと口にしたのです、「俺の人生、こんなはずじゃなかったんだ」と。わたしは、それがどういう意味なのか理解しかねましたが、問い返すことも憚られました。父は、息子に対してではなく、一人の牧師に向かって、そう告白したのだと思ったからです。わたしは、今でも、その父の告白が何を意味していたのか、問い続けています。

ヨシュアは、「**あなたたちは主に仕えることができないであろう**」と言います。主イエスは、「**父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない**」と言われます。わたしたちには、「できない」ことがあるのです。実は、「できない」ことだらけなのです。「できない」ことなのに、できていると思い込んでいるだけなのです。荒れ野で主イエスを誘惑した悪魔が、わたしたちにも、「あなたならできる」とささやくからです。けれども、「できない」ことを認めてよいのです。「できない」ことを認めざるを得ないのです。「できない」ことがあるのが、わたしたち一人ひとりだからです。

自分の「できない」を受け入れましょう。そして、隣人の「できない」を引き受けるのです。わたしたちは皆、「できない」を神に引き受けていただき、許されて共に集う者とされているのですから。